

献

辞

高嶺欽一先生は、平成9年4月に南日本新聞社を御退職と同時に教授として本学に赴任されました。先生は私と同じ旧朝鮮京城府でお生まれになり、私と同じ終戦の年の11月に、鶴田村に引き揚げてこられたということで、本学の教員というだけでなく、外地での終戦、引き揚げという苦しみを経験した仲間として、親しくお付き合いを頂きました。

先生は長い間南日本新聞社に勤務され、記者から報道部長、論説委員として活躍されましたので、本学に移られた後もこれまでの経験と学識を活かして頂き、「社会問題」、「社会政策」、「行政学」の授業を担当して頂きました。また、地域とつながりが深い地域研究所長として、地域研究の在り方を永年の記者経験から指導して頂きました。なかでも平成12年に印刷され公表された地域研究所の「研究年報」特集号、「鹿児島における高等教育を考える」は大学と地域、地域と本学の将来の在り方を考える上で示唆に富む企画でありました。その一部は南日本新聞紙上にも掲載されました。

大変残念なことです。最近大学教員セクハラ問題が多く、多くの大学で発生し、社会的にも強い指弾を受けています。本学ではセクハラを防止し、広報などを行う人権委員会を立ち上げましたが、初代の委員長に高嶺教授が選出され、要としての役割を果たされました。昨年本学学生が学業半ばに殺害されるという悲しい事件が起きましたが、その際にも人権委員会委員長として対応して頂き、適時適所で御助言を頂きました。厚く感謝申し上げます。また、本学は積極的に対外的活動を行っていますが、PRが下手だということでしょうか、市民にあまり目立たないこともあり、マスコミへの対応には心を砕いて頂きました。

御退職後も鹿児島にお住まいになるということですから、先生のあのにこやかなお顔と接する機会も多いことと思います。水泳選手として国体に出場したという経歴から健康には自信がおりと思います。ますますお元気で、本学の発展を見守ってくださいますようお願いして、お別れの詞と致します。

2002年 3月

学長 田川 日出夫

この3月、高嶺欽一先生は本学商経学科教授を退任されることになりました。1997年から今日までの5年間、先生は、本学科の「社会問題」「社会政策」「行政学」「高齢者福祉」などの講義を担当され、地域社会論分野の教育研究活動をされてまいりました。

商経学科は、1995年改革にあたり、教育研究の基盤として地学連携の視点をうちだし、そのスタッフの選任においては、社会的活動や実務経験者を含めて幅広く人材を求める方針をたてておりました。そこで、この地域をみつづけるジャーナリスト・高嶺欽一先生を本学科教授に招聘するにいたったのであります。

地域にふかく浸透されながら、かつクリティシズム（批判精神）に裏打ちされた時務の論（ジャーナル）を展開されてこられた先生の真骨頂は、地域の多分野にわたるひろい人脈（人的資産）に端的に示されております。わたしたちはそれらの提供をうけることにより、地域研究を、言葉による地域理解からさらに歩を進め、生きた世界のこととして感受するようになったのでした。

高嶺教授は、ご自筆の年譜にお示しになりましたとおり、1959年から1997年までの40年にわたり、南日本新聞社に席をおく新聞記者とし活躍されてこられました。それは、ただしくは、高度成長期から世紀末までの鹿児島ウォッチャーとしての活動と称されるべきものであります。

そうした先生の時代経験は、その時々的一般論に専横されがちなアカデミクトラックの議論を戒めるという態度として保持されておられたのではないかと拝察するものであります。鹿児島という地域の具体的状況に身をおき、かつ体系的な知を志向することの狭隘さを知りながら、本学において思考することの緊張こそ、先生がわたしたちに示された大学人としてのお姿であろうと思いたすのです。それはたとえば、この時代を、「第一次産業のウェートが高く過疎化高齢化の進んでいる鹿児島県に住む者の立場から」民意の恐ろしさを知れ、という一文（『南日本新聞』2001年7月31日付）が示しております。

また、2001年度の冬学期最終日にあたる1月21日の講義（「社会政策」1部・2部）のなかで、この地球をひとつのコミュニティとしてとらえたらグ

ローバル・イシューはどのように見えてくるだろうかと先生は問い直されました。思えば、このことは先生が時務の論をお書きになるときに、発想の基点とされていたことであつたと思われます。

高嶺先生が本学科において心をくばり、苦心されていたもう一つのことは、若い世代への教育、とりわけ鹿児島地域人となりゆく若い人々の「教養」教育についてでありました。この時代を生きぬくにあたり、コミュニティの成員はいかように自己形成されゆくのか、その先行者としての教師の提供すべきことは何であるのか。先生の講義や演習は、時務の論とおなじく、胸中に思うところを講義の内容として語られたものであつたと思われます。

高嶺先生と本学科とのこのさきのおつきあいを展望しながら、ここにひとまづは御礼とお別れをのべさせていただきます。

2002年3月

商経学科長 中山 一 樹